DISCUSSION PAPER SERIES

Centre for New European Research
21st Century COE Programme, Hitotsubashi University

030

宗教多元主義と移民文化の「宗教」化
ーヨーロッパにおける多文化主義のもうひとつの側面

久保田滋子

September 2007

http://cner.law.hit-u.ac.jp
Copyright Notice
Digital copies of this work may be made and distributed provided no charge is made and no alteration is made to the content. Reproduction in any other format with the exception of a single copy for private study requires the written permission of the author.
All enquiries to cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp

宗教多元主義と移民文化の「宗教」化

ーヨーロッパにおける多文化主義のもうひとつの側面[1]

一橋大学大学院社会学研究科博士課程

久保田滋子

１．はじめに

多文化主義[2]はいまだに発展途上の考え方であり、したがって言葉の意味も多岐にわたる。大きくわければ、ある地域、国家、共同体に複数の文化が共存している状態と、それを好ましいものとして推進する政策や思想的立場という２つの意味がある。多文化状況は今にはじまったことではなく、また現在、多文化状況のない地域はないという意味では、どの時代、どこの地域でも共通の現象であるが、後者の理念や思想は、常に歴史的条件の中で浮上してくるものである。

現在、ヨーロッパは、ムスリムなどヨーロッパ外部からの移民の増加に伴い、世俗化したキリスト教の価値観と、異文化共存の価値観という２つの自己認識の競合に苦しんでいるという。それらはどちらもヨーロッパが獲得した近代性と進歩の証と認識されている[3]。異文化への姿勢という点からみれば、前者は同化主義であり、後者は多文化主義である。一般に多文化主義は同化主義にくらべ、よきものという考え方があり、たとえばスイスのように、「移民はさまざまな側面を備えた市民ではなく、生産者、消費者、社会保険加入者、納税者という、社会、経済上の市民にすぎない[4]」という国では、法律的な権利に変わるホスピタリティとして、実際の政策とは別に、多文化主義という言葉やポーズが出回っている。しかし、必ずしもそれが移民とホスト社会の距離を縮めているとは限らない[5]。オランダでは公共放送にもムスリムの番組枠を持つほどにその権利が尊重されているが、それでも国家による処遇とは別のところで、彼らはムスリムとしての覚醒を促されるのだという。それは、「より広い意味での西洋社会に共通する価値と規範ー家族や社会の共同体的性格よ

---

[1] この原稿は 2007 年 2 月 10 日に行われたドイツ、カールスルーエ大学での発表に基づく

[2] Multiculturalism という言葉がはじめて出てきたのは 1960 年代と言われているが、政策として実施したのはカナダが最初である。以降、この言葉は、必ずしも政策のみでなく、広く多文化的状況とそれを肯定する言葉として使用されてきた。

[3] Casanova José ”Einwanderung und der neue religiöse Pluralismus“ *Leviathan-Berliner* Zeitschrift für Sozialwissenschaft 34 Heft2 (2006):pp.188-191
Casanova によれば、キリスト教の世俗化は”normal”で ”progressive”で ”aufgekläerte“（啓蒙された）ヨーロッパへの発展という自己意識と結びついているが、一方で多文化主義もまた、リベラルで民主主義的で人権尊重を旨とするヨーロッパの近代が獲得した進歩の証である。

[4] Bolzman, Claudio “La population âgée imigrée face à la retraite：probème social et problématiques recherche“ *Das Fremde in der Gesellschaft :Migration Ethnizität und Staat* pp.123-142 *(L'Altérité dans la Société：migration, ethnité, état)* Hrsg. Wicker, Hans-Rudorf (Zürich: Seismo Verlag 1996)
Statistisches Jahrbuch der Schweiz 2005, Bundesamt für Statistik (Zürich 2005)47

[5] 2007 年 3 月、国連の人種問題調査委員によって、スイスの移民をめぐる状況についての最終報告書が国連人権委員会に提出されたが、この内容は非常に厳しいものであった。「スイスはマルチカルチュラリズムを非常に誇りにしているのだが、それは単に神話ということなのか」という報道機関のインタビューに対し、調査委員は「神話ではなく、報告書に記載されているように、それは切り札であろう」と述べている。Swissinfo 23.März 2007, Tagesanzeiger 23.03.2007 など

りも個人を重視する価値体系であり、神の定めた規範よりも人間が創造した規範を尊重するという理性重視の社会的価値体系である[6]」ヨーロッパの人間観、宗教観に、日常のさまざまな場面で軋轢を感じることに原因があるという。つまり、ここには近代ヨーロッパが創りだした観念の中に包摂されることへの反発がある。スイスには依然として racism があり、オランダでは実際の政策に反映されない日常のできごとが問題になっているとしても、移民にとってよきものと思われている多文化主義を尊重する姿勢が、根本的な問題解決につながっているわけではない。だとすれば、多文化主義のあり方をもっと工夫すべきなのだろうか。その思想をさらに洗練して、現実に反映させるべきなのだろうか。

アメリカの多文化主義が、移民をはじめとするマイノリティ自身による異議申し立てと、かれらの自己意識の変革を含んだ社会運動であったのに対し、ヨーロッパの多文化主義は、世俗化したキリスト教とは相容れない価値観を受け入れるか否か、どのように共存していくのか、そもそもヨーロッパとその外部はどこで線引きされるのかという、いわば文明の問題も含んでいるため、上からの政策として、また異なる文化や宗教に対する理解を促すキャンペーンとしての色彩が強い。つまり、ヨーロッパではマイノリティ側からの運動ではなく、マジョリティ側からの移民の統合の論理という側面がある。しかし、多文化主義と同化主義が両極端にあるという考え方は両者に共通している。同化主義にはどことなくうしろめたさがあり、多文化主義には奇妙な明るさがある。方法は未完成だが、これを続行していけば、異文化・異宗教が理解し合い、明るい未来につながるような雰囲気が、多文化主義言説のまわりに漂うのである。しかし、常日頃、フィールドワークで移民と接している人間から見ると、またヨーロッパ外部の文化圏で育ち、そこで知的訓練を受けてきた身からすると、この明るさはどことなく落ち着かず納得しがたい気持ちに襲われる。多文化主義を取り入れ、またその重要性について広報活動を行っても、必ずしもその思惑通りにいかないのは、もしかしたら、この外部の人間が感じる落ち着きのなさと通底するものがあるのかもしれない。

多文化主義は、それが社会においてどうあるべきか、それをいかにして推進すべきかという点が論じられる。つまり、「いかにして」が問われてきたのである。しかし、なぜ多文化主義がその思惑に反して、移民にとって必ずしもよきものではないのかという点を考えるには、イデオロギーとしての多文化主義に内在する認識的な問題を考えてみる必要がある。本論では「どのようにして」ではなく「何か」に注目することで、両極端であると考えられている両者の関係について考察を試みる。次の章で、多文化主義と問題系が重なる宗教の多様性を歓迎する言説を取り上げてみたい。

２．多宗教は社会の損害にはならない

2005 年 1 月 29 日の Neue Zürcher Zeitung[7] に「多宗教は社会の損害にはならない　宗

[6]内藤正典「西欧への挑戦か？：西ヨーロッパ諸国におけるムスリム移民の覚醒」
[7] スイスのチューリヒで発行されている日刊紙

教多様性の危機とチャンス[8]」と題する投稿記事が載った。それは要約すると以下のような内容である。

2004 年に出版されたチューリヒ宗教案内には、かつてのプロテスタントの牙城に 370 もの教会、宗教グループ、センターが存在すると記されている。特に目立つのはキリスト教内部の多様化である。しかし、キリスト教とは異なる宗教の数もかなりにのぼる。スイスでも西ヨーロッパでも、それは今にはじまったことではない。外来の宗教は教会の尖塔のように目には見えないだけで、狭い部屋に押し込められてきたのである。そこで、このような質問が出る出あろう。一体いくつの宗教がひとつの社会、ひとつの街に存在しても大丈夫なのか。多くの宗教は社会の安定を壊すのではないか。しかし、宗教にそのような力があると思われているのは意外である。つい 30 年前まで、宗教は非近代的で非力なものと思われていた。イスラムという敵を持つことで宗教は過大評価された。

そして著者は、歴史的に見ても宗教の多様性が社会の結束を脅かした確証はない、むしろキリスト教の単独支配が例外的であるとして、キリスト教がローマ帝国の国教になる 4 世紀末以前、特にヘレニズム時代の事例をあげる。それによると、当時は多くのカルトや宗教的団体が存在していた。多神教で多くの神々が存在し、人々は状況に応じて違う神を崇拝し、同時にいくつかの宗教集団に所属することも稀ではなかった。そのうち徐々に宗教集団が互いに排除しあい、また一人の信徒が多くの宗教に同時に所属しないという思考が現れてきたのだという。また、著者はヨーロッパ外にも目を向ける。アジアでは多宗教は歴史的にも現在でも、むしろ当然のことであるとして、インドと中国の事例が挙げられている。中国文化圏では 1 世紀の半ば以来、儒教、道教、仏教が同時に存在しており、ここでは宗教多元性のモデルが提示されている。そして、宗教が混在せずに共存しえたこと、また宗教史的には多宗教の共存は多くの文化圏で特徴的であったと述べられている。

後半では、現在のヨーロッパの多宗教状況は移民の流入により加速されたこと、特にムスリムとのさまざまな問題が可視化したことにより、多宗教であることに対する危機感が高まったが、こうした新しい宗教多元主義[9]は問題ばかりではなく、チャンス、挑戦、利益をもたらすものであると述べている。

ここには問題が 2 点ある。ひとつは、宗教という言葉を使うしかないにせよ（一部で教義 Lehre と言い換えているが)、キリスト教の宗教概念を紀元 1 世紀の中国に当てはめて、３つの宗教の共存が可能であったと言っている点。二つ目は、この記事の主題は、移民によって加速された「新しい宗教多元主義」についてであるが、それが社会を脅かすとは限らないという事例としてヘレニズムやインド、中国は適切であろうかという点である。

３．宗教という概念

[8] 29.Januar 2005, Neue Zürcher Zeitung “Viele Religionen schaden der Gesellschaft nicht – von den Gefahren und Chancen der Religionspluralität“ von Martin Baumann

[9] der neue Religionspluralismus　ドイツ語で pluralismus、英語で pluralism と書かれたものは「多元主義」という訳をあてた。

私は日本人として、儒教と道教と仏教が宗教共存の事例として挙げられることに違和感を覚えるが、それはこの３つのどれもが宗教という言葉にそぐわないと感じるからである。日本における仏教や神道も宗教と呼ばれているが、日本では、宗教という言葉はヨーロッパから入ってきたもので[10]、もともとそのような観念はなかった。われわれの仏教や神道への関わり方は、ヨーロッパの人々のキリスト教への関わり方とは違って、宗教という言葉では表現できない部分がある。たとえば、「あなたの宗教は何ですか」と聞かれて、それに答えられない日本人も多い。日本人が「無宗教」というわけではない。西洋の religion に由来し日本語に翻訳された語を用いて、自分たちの精神文化のある局面を言い表すことが難しいのである。仏教とか神道と呼ばれているものは、われわれの感覚ではキリスト教を基準にした religion とは異なる。中国でもやはり宗教は西洋から輸入された言葉である。それも、直接入ってきたものではなく、日本の翻訳語をさらに輸入した。当然、中国の文化も religion という言葉で説明するのは難しいであろう。特に儒教は倫理体系であり、支配者と非支配者の間のあるべき振る舞い、関係を規定する道であった。道教や仏教と同列にあるものではないし、ましてや宗教の概念でとらえられるものではない。現代のヨーロッパの多宗教と同じ状況があったと考えることはできないであろう。それは、宗教という概念の違いであるとともに、その宗教の社会におけるありかたの違いでもあるからである。

言葉の問題とは異なるが、移民とホスト社会の宗教に対する感覚の違いは、現代のヨーロッパでも観察することができる。スイスには難民として受け入れられたチベット人のコミュニティがある。チベット語で宗教に相当する言葉はチューである。チューとは森羅万象の秩序であり、また人間社会の秩序でもある。ゆえに、学問、政治、医学、人の生き方など、生活全般にかかわりをもってきた。移民した人々がそのような観念を持って暮らしているわけではないが、かれらの「宗教的な場面」は、チベット仏教に関心を持っているスイス人の実践とは大きく異なっている。チベット人が集まって行う宗教的儀式は非常に簡素である。ダライ・ラマの誕生日や憲法記念日、婦人会の集会などでは、インドから派遣されている僧侶を呼んで読経してもらうが、このとき「宗教的」な雰囲気が漂っているかというと、必ずしもそうとは限らない。子供が走り回ったり、誰かが写真を撮っていたり、混沌とした雰囲気がある。これは、インドのチベット寺院で行われる法要のときの雰囲気と同じである。ときに、インドから高僧がやってきて１日中説法を行うが、集中力の続く短い時間に、人をひきつけるような話をするのではなく、朝から夕方までほぼ１日中、一般には難しい話をし続けるのである。その間、目を閉じて瞑想している人もいるし、お茶を飲んでいる人もいる。話の内容を理解するというよりも、高僧と同じ場にいて、その

[10]日本は 1639 年から約 220 年間鎖国政策をとり 1858 年に終焉したが、その後、非常に短期間に西洋の文化が流入し浸透していった。宗教という言葉は、このときヨーロッパから入ってきて日本語に翻訳されたものである。日本を含め、非西洋の近代化過程における西洋の文化的影響はきわめて大きなものである。しかし、それが地元の思想や観念をすべて覆したか、そこに両者の弁証法的統一が見られたかといえば、必ずしもそうとはいえない。両者は並行的に存続してきたといえるだろう。宗教に限らず、社会、個人など、多くの言葉が翻訳され、その多くが中国でも取り入れられた。これは、ヨーロッパでは当たり前の概念が、日本や中国には存在しなかった、あるいは全く異なる形で存在したということである。

声を聞いていることに意味があると言う人もいる。

一方、スイス人が通う仏教センターでは、キリスト教の教会で行われるミサのように式次第を整え、ドイツ語訳されたお経を唱和して聖歌を歌うところから、ほとんど瞑想に時間を費やすところまでさまざまである。しかし、ここでは仏教的な理論や思想を理解することと、「宗教的」な雰囲気が大切にされているように思われた。ダニエル・ヴァレンタインの言葉を借りれば[11]、それは is-ness（何かであること）ではなく about-ness（何かについて）であり、存在論ではなく認識論、ムードではなくマインド、さらに言えば、身体より理解ということになる。瞑想は確かに理解より身体を重視するが、身体を目的としているかどうかという違いがあるように思われる。

チベット人と仏教センターに通うスイス人の間には全くと言っていいほど交流がない。その理由はコミュニティの違い、移民のアイデンティティと宗教の関係で説明される。しかし、両者の宗教に対する感覚の違いにも注目すべきである。この論考のはじめに、オランダのムスリムが、多文化主義政策の中にありながら、ヨーロッパの人間観、宗教観に、日常のさまざまな場面で適合できない感覚を抱いているという例を出したが、宗教、チベット仏教というヨーロッパの言葉を当てはめられるということは、単に言葉の問題だけではなく、さまざまな観念に包摂されていくということでもある。チベット人は、スイス人の通う仏教センターを同じチベット仏教とは思えないと語った。

４．宗教を数え上げる

さて、ローマ時代初期やヘレニズム時代、またインド、中国における宗教の共存と、現代のヨーロッパの多宗教状況を連続させる場合の問題点はどこにあるのか。それは移民の存在である。多宗教という同じ言葉を使っているが、現在の問題は宗教そのものではなく、それを担う人（移民）にある。もし、この記事が、キリスト教の内部の多様性は社会を脅かさない、あるいは上述のような移民以外のヨーロッパ人の仏教徒とキリスト教徒の共存は社会を脅かさないという話ならば、同じ文化圏の人々の間の宗教の多様性という意味で、ローマ初期、ヘレニズム、あるいはインド、中国の多宗教状況とつながる。また、ローマの初期と現代のインドならば共通点があるかもしれない[12]。著者はもちろん移民だけに限定

---

[11] Daniel, E Valentine (2000) “The Arrogation of Being by The Blind-Spot of Religion” *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 33: 83-102 ここで、バレンタインはキリスト教と信仰の結びつきについて述べている。アメリカへ移民したスリランカ人のヒンドゥー教の儀式はキリスト教の信仰に基づいており、スリランカで見られた儀式とは様相が異なるという。それを、彼は認識論的であり、about-ness であると呼んでいる。これは、チベット仏教に対するスイス人の観念と、チベット人の観念の相違に共通するものである。バレンタインが about-ness と呼ぶのは、宗教の特性を信仰であるとしているからであるが、しかし、現在のヨーロッパにおいて、キリスト教が信仰と結びつくかどうかは、必ずしも明確に言えないだろう。Casanova は、ムスリム増加などの社会情勢の下では、ヨーロッパにおけるキリスト教の世俗化とキリスト教的アイデンティティは複雑に絡むとしている。世俗化は「所属なき信仰」（Grace Davie）であるが、現代の社会情勢の中では、むしろ「信仰なき所属」（DanieleHervieu-Leger）が浮き彫りになっているのではないかと言う（Casanova 上掲書 pp.187）。ここでは、スイス人の仏教への関わり方を、チベット人のそれと対比する形で about-ness としたが、スイス人がチベット仏教を信仰の対象にしているかどうかはケースバイケースのように思える。

[12] Valentine 上掲書 pp85. 28-40.

したわけではなく、現代の宗教の多様性を述べ、その中に移民の問題を含めたのであり、それがゆえに、時間と空間を異にする事例が出てきたのであろうが、しかし、ならばさらにその事例には適切ではないであろう。

現代の宗教の多様性に関する議論は、移民とホスト社会だけではなく、キリスト教の多様化など、さまざまな局面を取り上げる。キリスト教もイスラム教も、チベット人のチベット仏教も西洋人のチベット仏教も、すべて同じ土俵にのせて宗教の多様性とみなす。それは実際の活動にも反映されている。たとえば、スイスでは「ルツェルン州における宗教の多様性」(Religionsvielfalt im Kanton Luzern)、「スイスの宗教」(Religionen in der Schweiz)、Inforel「宗教インフォメーション」(Information Religion)、Remid「宗教学からの広報活動」(Religionswissenschaftlicher Medien- und Informationsdienst)などがさまざまな広報活動を行っており、また最近ではベルン市が遊閑地を買い取って「宗教の家　文化のダイアログ」(Haus der Religionen Diolog der Kulturen) を建設中である。どこも、インターネットや各種イベントを通じて、いわゆる伝統的なキリスト教ばかりではなく、街にはさまざまな宗教が同居していること、それはただ多様であるばかりでなく、対話や交流の可能性もあることを示唆する。

2004 年に出版された『チューリヒ宗教案内[13]』には市内に 370 の宗教施設、グループが存在すると書かれている。それらは各宗教の解説の下に分類され、事典形式に編集されている。Inforel は同様にバーゼル市内に 400 の宗教施設、グループを見出し、同じく編集出版している。それに類する宗教辞典は他に何種類か出版されている。たとえば“Kirchen, sekten Religion[14]“（教会とセクト宗教）の仏教の項目では、仏教の大まかな歴史の記述のあとに、テラワーダ、マハーヤナ、ヴァジラヤーナの３つの流れ、西洋の仏教、その他セクト[15]項目があり、それぞれの宗旨や状況が解説されている。そのあとに、３つの流れに禅を加えてさらに細分化し、ドイツ語圏でそれらに属するグループを並べて、それぞれの簡単な解説が載っている。ちなみに、チベット仏教の項目に載っているグループは、ほとんど全部西洋人を対象としたものである。宗教の多様性を宣伝する広報活動は、だいたいこの事典の考え方に即している。多くの宗教を見出し、分類し、その最もエキゾチックな部分を見せ、多宗教共存のポジティブな側面を積極的に宣伝していく。ルツェルン市では大学が中心となって、市内の宗教の多様性を市民に広く知らせる活動を行っている。その象徴でもあるカラーの写真入りパンフレットには、ルツェルン州、市内、市郊外で見つけ出された宗教グループと施設が、ユダヤ教、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、その他に分類されて、それぞれロゴマークがつき、地図に所在地が記載されている。また、すべてのグループの解説が写真入りで載せられている。これを、観光案内所をはじめとして市内随所で配布して、宗教の多様性のアピールに努めている。もっとも人気があるのは、それら

---

13 Humbert, Claude Alain *Religionsführer Zürich* Zürich: Orell Füssli 2004
14 Schmid, Georg, Schmid, Georg Otto(Hrsg.) *Kirchen, Skten, Religionen* Zürich: TVZ 2003
15 オウム真理教について解説がなされている

の宗教施設をめぐるバスツアーで、年に３－４回開催されている。私は 2005 年 11 月にこのツアーに参加して、タミル系の移民が集うヒンドゥー教の集会所、ベトナム移民が一軒家を買い取って開設した寺院、マケドニア、コソボ出身のムスリムの祈祷所（文化センター）を訪れた。どこも外からは、その存在がうかがい知れないようなところにあるので、市内に知られざる異宗教が数多く存在していることを知るには、格好の体験であった。それぞれの場所で、コンダクターの学生がその宗教の解説を読み上げ、参加者は各所で小一時間の見学をする。はじめに、それぞれの歴史や教義、儀礼などの話を聞くので、団体での観光旅行のような感じでもあった。時々地元紙[16]の取材が同行し、異文化、異宗教に接する大切さと感動を述べる参加者の声を載せる。

広報活動自体は重要なものであるが、ヨーロッパの外部から見ると、これらの宗教の多様性への「礼賛」のいわば奇妙な明るさが気になるのである。ヨーロッパが宗教の複数形に気づいたのは 19 世紀と言われている。それまでも、キリスト教のほかに、ユダヤ教、マホメット教、その他の偶像崇拝という区別はあったが、それは今のようなキリスト教と同じ土俵で考えられていたのではなく、大きく分ければ、唯一の神を正しく信仰するキリスト教徒とそれ以外であり宗教は唯一キリスト教徒のものであった。マスザワによれば、ヨーロッパが仏教を発見したこと、またそれと前後したアジア地域の言語研究が盛んになったことから比較言語学が興隆し、ヨーロッパのアイデンティティがさまざまに議論されてきたのだという[17]。「世界宗教」という観念が生まれたのもこの当時であった。はじめは普遍宗教という意味でキリスト教のみの単数形で使われていたが、やがて 20 世紀の前半には仏教、イスラム教を取り入れて複数形になり、さらに「世界宗教」と分けられていた「民族宗教」の概念も消えていったのだという。キリスト教以外の宗教をキリスト教と同列に置き、宗教の複数性を取り入れたことが、ヨーロッパの近代形成の一つの側面であったとすれば、現在の多文化主義・宗教多元主義は、キリスト教の衰退とともに、さらに宗教の複数性が強調されるという、ヨーロッパの新たな文化形成なのかもしれない。これらの広報活動の明るさは、将来の先取りというイメージでもある。しかし、それはまたヨーロッパの観念で、ヨーロッパの内部にさまざまな宗教がまた発見されていく契機のようにも見える。2006 年 5 月に、異宗教間対話をめざした「スイス宗教協議会」（Schweizeriche Rat der Religionen）が発足したが[18]、ここに召集されたのはキリスト教、イスラム教、ユダヤ

---

[16] たとえば、Neue Luzerner Zeitung 2005 年 5 月 23 日「聖なる場所を探して」（Gebetshäusern auf der Spur）、Neue Luzerner Zeitung 2006 年 2 月 20 日「モスクを訪ねて　熱いテーマに言葉を失う」（Besuch in der Moschee Kein Wort zu heissen Themen）

[17] 比較言語学によって、インド・ヨーロッパ語、インド・ゲルマン語、アーリア語という「語族」が発見され、言語の面からヨーロッパが形作られた。それと対比する形でアーリアより劣ったセム系の言語という概念も生じたが、キリスト教をこのセム系の出自から切り離そうとする努力、イスラム教の位置づけなどがその後の宗教観にも反映された。世界宗教という概念が現れ、キリスト教徒並ぶ宗教について議論されたのもこの頃であるという。
Masuzawa, Tomoko *The Invention of World Religion: Or How European Universalism Was Preserved in the Language of Pluralism*, Chicago: University of Chicago Press, 2005

[18] Rutisbauser Sj, Christian M. “Vom Religionspluralismus zum Dialog” *Stimmen der Zeit* Heft12

教のみであった。これに対して、なぜ仏教とヒンドゥー教は招かれないのか、さらにもっとたくさんの宗教があるのに、なぜ宗教というと３つ、５つしか数えないのかというクレームも出た。宗教の多様性は、多くの宗教を数え上げ、同じ土俵に立ってたがいに理解しあおうという側面がある。たとえば、禅とかヨガのように、それを生んだ地域では宗教概念にもあたらないものも宗教に格上げされていくし、本来、宗教とう言葉がなく、この言葉で自分たちの精神文化を言い表せない人々の日常も、宗教として育て上げられていく。

2005 年 5 月、ルツェルンでは「ルツェルンの宗教、市内と郊外」という催しがあった。そのときもバスツアーが企画されたが、このときはチベット仏教センターが含まれていた。移民の宗教施設ではなく、スイス人の通う、街中の建物の中の簡素な部屋である。そこは主に仏教教義の講義を受ける場であるが、多分チベット人から見れば、やはり自分たちの「宗教」と同じものとは思えないであろう。この章のはじめに、「多宗教という同じ言葉を使っているが、現在の問題は宗教そのものではなく、それを担う人（移民）にある」と書いた。これは多文化主義のかたちであり、多文化主義には普通、西洋人の仏教徒は含まれないからである。それに対し、宗教多元主義は、むしろ人ではなく文化を優先している。チベット仏教を担う人は誰であれ、チベット仏教という宗教がポイントである。こうして見ると、現在の宗教の多様性とヘレニズム文化、インド、中国をつなげたのは、決しておかしなことではないかもしれない。しかし、何をもって宗教とするのか、誰がそれを決めていくのかということを考えると、昔の事例を参照することができないのは明らかである。

５ 階層性

多文化主義あるいは宗教多元主義とは何なのか。それは、ローマ時代初期、ヘレニズム時代やインドや中国で見られた宗教の多様性の例とは根本的に異なる。多文化主義とは、たとえば宗教がある地域、社会に混在していることではなく、移民とホスト社会、マイノリティとマジョリティという階層性の中に現れるものである。これは、非西洋と西洋の階層性と言い換えてもよい。逆にいえば、この階層性がなければ多文化主義はあまり意味をなさない。むしろ、その階層性を見えにくくするために、文化の差異の尊重という装いをもつものである。本論で取り上げた宗教の多様性の広報活動は、一見、多文化主義とは異なり、ローマ時代初期、ヘレニズム時代や古代中国のような宗教の混在をイメージさせる。移民とホスト社会は同じ土俵に立ち、あるいは横並びになって多様性を歓迎しているように見える。しかし、ここにも非西洋と西洋という階層性は同じように存在するのである。こちらは知の階層性と言うべきかもしれない。そこでは、さまざまな文化にキリスト教的な宗教概念があてはめられ、数え上げられていく。ダニエル・バレンタインは、かつてキリスト教が世界に及ぼした影響について、「『被征服者たち』もまた、征服者と同じように『宗教』をもっていると証明されることを望んだ。オリエンタリスト、インド学者、比較宗教学の専門家、そして人類学者の格別な努力によって、西洋と西洋化された人々は、世

Dezember 2006 p.798

界中のすべての人々が『宗教』をもっているわけではないにもかかわらず、それをもっていると理解するようになった[19]」と述べている。かつて植民地経営や布教、また翻訳を通して世界に広まったキリスト教的宗教概念が、現代においては、多文化主義と言うイデオロギーを通して、なお継続していると考えるのは極端な発想であろうか。しかし、かつてヨーロッパの外部で展開された知の階層性は、現代もヨーロッパの内部で継続しているという点には目を向ける必要がある。多文化主義が階層性をなくすのではなく、多文化主義自体が階層性を内在している。ゆえに、必ずしも同化主義の対極にあるものではないという点を私は指摘したい。

これは決して西洋的思考や広報活動に対する異論ではない。むしろ、非西洋と西洋は常にそうした関係の中にあり、日ごろ意識されていないにすぎない。日本人は宗教を問われて答えに窮すると述べたが、われわれはその原因が翻訳語にあるとは思っていない。ほとんどの場合、自分たちの「宗教意識」が薄いと考える。ヨーロッパで仏教が宗教として認められ、数え上げられることは、ふと立ち止まって考えれば不思議なことである。チベット人が自分たちの精神文化を「宗教」と認識し、西洋人の実践を正統な「宗教」ではないと感じるのも不思議なことである。キリスト教に基づく「宗教」概念が逆転したかのようである。多文化主義が同化主義の対極ではないという認識に立つならば、宗教を数え上げ、同列に並べるのと同時に、キリスト教以外の宗教が、西洋の概念で語れるのかどうか問い直すこと、また多様性を裏付けていくよりは、その要素を相対化する作業が必要であろう。

それは、多文化主義の大きな課題のひとつとされている「対話」と「理解」にもあてはまる。アメリカのハーバード大学を基点にした "The Pluralism Project"という宗教多元主義に関する研究ネットワークがあるが、そのウェブサイト[20]には、ダイアナ・エックによる「宗教多元主義とは何か」という解説が最初に載っている。そこでは、1.多元主義（pluralism）は単なる多様性（diversity）ではなく、 多様性に関する精力的な取り組みである　2. 多元主義は寛容や容認ではなく、差異を通して理解する積極的な探求である 3. 多元主義は相対主義ではなく、コミュニティ同士の出会いである　4. 多元主義は対話に基づく　という 4 点が宗教多元主義（Pluralism）の課題としてあげられている。これは、アメリカに限らず最近の多文化主義の考え方に共通しているように思われる。スイスでも、「宗教多元主義から対話へ[21]」という論文が出たが、ここでも単に宗教の多様性を認識するだけではなく、積極的に対話の場を設け、理解につなげる場が多く出てきたことが記されている。「宗教」が、その意味を問われることのない透明な言葉として他文化をすり抜けていくように、「理解」もまた自明のこととして語られる。「近代の西洋においては、理解と

---

[19] Daniel, E Valentine (2000) "The Arrogation of Being by The Blind-Spot of Religion" *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 33: 83-102　pp85. 20-24. （久保田滋子・訳 「『信仰』の確立と集合的暴力」『20 世紀の夢と現実ー戦争・文明・福祉』 彩流社　2002 年）

[20] http://www.pluralism.org/pluralism/what_is_pluralism.php

[21] Rutisbauser Sj, Christian M. "Vom Religionspluralismus zum Dialog" *Stimmen der Zeit* Heft12 Dezember 2006

知識が権力の象徴であり、誤解[22]、無知、混乱は無用のもので好ましくなく、それがゆえに克服すべきもの」とされてきた。誤解、あるいは理解不可能な状況は好ましくないものであり、それを前提にして何かを考えることはなかった。理解にはさまざまな要因が重なる。言葉、表現、知識、自己と他者の距離。非西洋からやってきた移民は、西洋で教育を受けたとしても、これらの尺度が西洋人と同じとは限らない。だとすれば、ここで前提にされている理解は、誰にとっての理解なのか。ここでもまた知の階層性が生じるのである。宗教概念を相対化する必要があるように、ここでも理解ではなく、誤解や理解の相違を前提にすべきではないのだろうか。

６．文化を解きほぐす

2004 年 10 月 22 日から 2005 年 2 月 28 日まで、チューリヒにおいて“Hinduistisches Zürich: Eine Entdeckungsreise“（ヒンドゥーのチューリヒ：発見の旅）という催事が行われた[23]。開催の準備にあたって主催者は考えた。3000 年の歴史をどこから始めればいいのか、どこで終ればいいのか。ヒンドゥイズムは 19 世紀に西洋で創られた概念である。すべての解説書は西洋の学問によってできたものだ。一見してわかる姿はない。ヒンドゥイズムとは、実践も観念も宗教でさえも、さまざまなものが入り混じっているのだ。どうやってこの内部の複合性を見せていけばいいのだろうか。主催者はそれらを、現在スイスに住んでいるヒンドゥーの人々の中に見出そうとする。哲学や儀礼を持ち出さずに、ヒンドゥイズムに対する彼らの個人的な意味を取り上げようとした。準備段階で “Hindu way of life” を集めたところ、普通ならヒンドゥイズムの展示に重要ではないことが大勢をしめたが、それをそのまま生かすかたちで、会場で各人に料理教室を開いてもらったり、ヨガの指導をしてもらったりした。宗教的なアイデンティティもグループやエスニックな集団単位ではなく、あくまで個人の理解に焦点をあてた。それは、ヒンドゥーという言葉によって表れる無意識的なステレオタイプの排除をねらったものだった。つまり、「統一性あるいは弁証法的統合に照準を合わせるのではなく、彼らの表現の中に多様性を見出すべき[24]」ということであった。

そのような考え方を反映させるために、主催者はスイス人のヒンドゥー実践者も参加させることにした。ヒンドゥーはエスニックなものばかりではないからである。しかし、これは主催者の意に反するトラブルも引き起こす。個人に焦点を当てているにもかかわらず、たとえばハレ・クリシュナ（Hare-Krishna）のように西洋人の参加するクループは、セクト間のトラブルを起こすことがある。そのようなセクトの参加やサイババ信奉者への非難もあったが、主催者は、まず住所と名前を持った個人として参加することを要請して、ト

---

[22] Misunderstanding　論文全体の趣旨からすると、誤解だけでなく、理解不可能性という意味合いも含む。

[23] Johannes Belz “Hinduistisches Zürich: Eine Entdeckungsreise“ *International Asienforum* Vol.36, No3-4, 251-263 Freiburg: Arnold Bergstrasser Institut 2005

[24] 上掲書　pp.253. 20-22

ラブル回避を図った。こうして、あくまでヒンドゥイズムの個人的意味の解釈を重視したのである。

この催しはヒンドゥイズムが宗教であるという前提にたっていない。その中に生きる人々の漠然とした全体的世界を個人の視点から表現し、ある人には宗教かもしれず、ある人には宗教ではないかもしれない状況を浮き彫りにした。日本や中国など非西洋文化圏では、religion を自国語に翻訳し、それ以降、自分たちの文化をそれにあてはめて説明してきたが、同時にヨーロッパは非西洋の精神文化を宗教という概念にあてはめてきた。しかし、移民とのよき関係を模索するならば、ホスト社会がそれに疑問をもって、ときにはヨーロッパが作り上げた観念を解きほぐしてみる必要もあるのではないだろうか。